

令和 6 年度秋田県総合政策審議会
第 2 回 観光・交流部会
(議事要旨)

1 日時 令和 6 年 7 月 12 日 (金) 午後 2 時～午後 4 時

2 場所 第二庁舎 51 会議室よりオンライン開催

3 出席者 (敬称略)

【観光・交流部会委員】

吉澤 清良・・・・・・立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部教授

黒川 花子・・・・・・株式会社千葉旅館 取締役

守屋 奈美・・・・・・有限会社石孫本店 総務企画・海外担当

豊田 哲也・・・・・・国際教養大学 中嶋記念図書館長・教授

【県】

観光文化スポーツ部 次長 佐々木 重夫

次長 伊勢 弘

次長 鈴木 雄輝 ほか関係課室長等

4 吉澤部会長あいさつ

本日はオンライン会議ということで、私は大分県別府市の大学から参加をしている。観光学部の授業では、観光産業に勤める方と学生が直接話をする機会を多く設けているが、その際の学生の反応を見ていると、非常に大きな刺激を受けている。また、直接話をする機会を持つことで、観光業で働く、ということをより具体的に意識できるようになった、との意見もあった。前回の部会でも人材不足に関することが話題となり、観光の現場と学生をつなぐような施策の重要性を改めて感じている。

当部会は、新秋田元気創造プランの観光・交流分野について議論する場であり、対象となる分野が多岐にわたる。オンライン開催のため、集合開催よりは進行が単調になるかもしれないが、皆さんに御協力をいただきながら会議を進行してまいりたい。

5 議事

(1)「新秋田元気創造プラン」戦略 3 の推進に係る施策の提言について

(第 1 回部会で委員から意見が無かった施策の方向性について、担当課より主な取組内容を説明し、委員から意見をいただく)

□小松観光戦略課長

(施策の方向性 1－④について、資料 1 により説明)

●吉澤部会長

ただ今説明のあった目指す姿 1 の施策の方向性④旅行者の多様なニーズに応じた受入態勢の整備について意見交換していく。概ね 1 項目あたり 10 分程度で進めていくため、進行に御協力をお願いします。

人材育成に関わる説明と、観光案内看板にリニューアルに関する説明があったが、例えば、ユニバーサルツーリズムという観点も必要かと思う。全国的には三重県と沖縄県が先進的に取り組んでいるため、秋田県もそういった観点から、多様な旅行者ニーズに対応できる受入態勢の整備が必要かと思う。

○黒川委員

実際に秋田に来た方が、どのようなことが良かったのか、観光地を探すときにどのようなことに困りごとがあったのか、などの情報があると良い。宿泊した方に対して、会計の際にアンケートを行うことができればいいかもしれないが、現状では対応が追いつかない。例えば、インバウンドの受け入れを積極的に行っている県の宿泊施設などで、チェックアウト時にインバウンド向けアンケートを行ってニーズを拾い上げる、ということはないか。

□小笠原誘客推進課長

インバウンドに限らず、チェックアウト時にアンケートを取ることは難しく、それは県の宿泊施設でも同様である。宿泊者のニーズを拾い上げることは重要だと思っており、施設の負担が大きくなる手法を考えていく必要がある。

●吉澤部会長

アンケートの実施については、紙ベースではなく、QRコードの活用も考えられる。

○守屋委員

観光案内看板については、もっと多くの場所で目にする機会があってもいいと感じている。空港や主要駅には配置されていると思うが、道の駅やバス停などにも配置され、QRコードで検索できるようになると、観光客だけでなく、県民も活用しやすい。

□小松観光戦略課長

令和 6 年度の事業では、道の駅や空港に設置されている大型看板 27 基のリニューアルを行うこととしている。令和 6 年度中に看板を新設する予定は無いが、QRコードであれば、他の場所に貼り付けるなどの形で展開できると思われるため、事業の実施方法を工夫したい。

○豊田委員

受入態勢の整備については、英語対応も含めて県内事業者の取組は進んでいると感じるが、重要なのは、その取り組んでいることをインターネット上で知らせているかどうか。

旅行単価の高い個人旅行者、特に家族旅行をひきつけられるかは、小さい子どもから祖父母まで、家族の多様なニーズに応じた受入態勢についての情報が「ネット上に示されているか」にかかっている。「来てみたら意外に良かった」では、実際に来た旅行者は満足であろうが、観光ビジネスの成功にはつながらないのではないか。例えば、Google マップ上で県内の有名な観光地を見ても、外国語対応しているかどうか分かりづらい。こういった点が改善できれば、更に誘客に結びつくのではないか。

●吉澤部会長

インバウンド向けの受入態勢は着実に整備が進んでおり、観光関係のアンケート結果を見ても、コミュニケーションでの困りごとは減ってきている。ただし、豊田委員の指摘どおり、態勢整備ができていることと、そのことが周知できていることは別問題。積極的に秋田県の観光地も多言語対応できていることを情報発信してほしい。

●吉澤部会長

次に、目指す姿3について説明をお願いします。

□小原文化振興課長

(施策の方向性3-①について、資料1により説明)

●吉澤部会長

方向性3-①あきた芸術劇場を核とした文化芸術の発信とにぎわいづくりについては、ミルハス単体で考えるものと、周辺を巻き込んで行うもの、大きく2種類の観点がある。昨年度の提言書では、千秋公園も含めた活用を促す企画や、周辺と連携したアフターM I C E等に触れている。

○豊田委員

目指す姿3で求められるのは、文化芸術をどのように人や物の交流拡大につなげていくか、ということ。その点で言うと、四季折々の祭りや伝統行事、民俗芸能を如何に次世代に継承するかが重要な視点となる。

秋田城や大湯環状列石など、国際的価値を有する秋田県の史跡等について、県内の若い人たちが知る機会を設けることで、若い人がそういった文化に興味を持つように働きかけること、秋田の歴史や文化に関する基礎的な知識をつけることが必要ではないか。

インバウンド誘客の観点からも、文化の次世代への継承は重要だと考えている。県内の多くの方は秋田の歴史について詳しくなく、観光関係の仕事に就いている方も同様に詳しい方が少ない。インバウンド誘客の関連でも、秋田の日本酒の歴史的な経緯を説明した方が購買意欲につながる。

●吉澤部会長

県民が地域のことをよく理解するための象徴的な存在として、ミルハスが何か役割を

担うことができると良い。

○黒川委員

ミルハスやアトリオンで開催される催しについて、人気があるものと集客が難しいものなど、傾向は把握しているか。

□小原文化振興課長

ミルハスへのヒアリングから、いわゆるポップスやメジャーなアーティストは集客力が高いが、クラシック等は集客が難しい状況にあると認識しており、施設の稼働率だけでなく、利用人数の増加に向けた分析が必要である。

○黒川委員

例えばコンサート×日本酒など、秋田ならではの素材をコラボレーションした催しも面白いかもしれない。鹿角市の道の駅おおゆでは、車やバイク、ロックミュージック関係のイベントが開催されており、地域のお祭りよりも集客力が高い。意外なものが集客に結びつく事例は多くあるため、そういった視点も大切にしてほしい。

○守屋委員

県出身音楽家による音楽愛好家を対象としたアウトリーチ事業は非常に良い事業だと思う。子どもがプロに教わる機会を持てるのは非常に良いことであり、様々な文化芸能のジャンルでこういった取組を進めてほしい。

●吉澤部会長

昨年度の提言書では、秋田公立芸術大学との連携や、静岡県ふじのくに子ども芸術大学を参考とした取組について触れているが、現時点で具体的な進捗があれば教えてほしい。

□小原文化振興課長

秋田公立美術大学との連携については昨年度も取り組んでいるが、今年度は主に高校生を対象としたスキルアップ研修を実施することとしている。ふじのくに子ども芸術大学に類似した取組については、まだ具体的な動きは無い。

●吉澤部会長

無形民俗文化財万博について概要を教えてほしい。

□小原文化振興課長

羽後町の西馬音内盆踊りや能代市の切石ささらなど、県内の多様な芸能、芸術を体験していただくイベント。見るだけではなく、実際に体験してもらうことで、県内の民俗芸能に興味を持っていただき、それを次世代につなげていきたいという趣旨の事業であり、

令和6年度で3年目の開催となる。

○豊田委員

民俗芸能については、観光や県民のアイデンティティの形成に是非活かしていただきたい。

また、ミルハスの活用について、ミルハスの劇場としての機能は非常に高く、その機能を最大限に活用するために専門の職員が頑張っていることと思う。行政としては、余り細かい指示を出さず、活用については専門家にある程度任せるという意識も必要である。例えば、東京を例とすると、池袋芸術劇場は非常に質の高いイベントが開催されているが、その個別の企画に対して、都が細かく指示を行うことは少ないのではないかと。

●吉澤部会長

次に、目指す姿4について説明をお願いします。

□樋口スポーツ振興課長

(施策の方向性4-①、③について、資料1により説明)

○豊田委員

世界で活躍できるアスリートの育成にける予算は最小限にとどめるべきであり、かつ、種目については本人の意向を尊重すべき。子どもたちがスケートボードやヒップホップに打ち込みたいのであれば、それを支援するべきであり、スポーツ支援が子どもたちに対する趣味の押し付けになっていないか、改めて考えてほしい。また、高校生の部活に力を入れることは、場合によっては学修の軽視になり、秋田県の将来にはつながらず、秋田県を高校生にとって魅力ある県とすることにもつながらない。

スポーツ立県に関する施策については、交流人口の拡大やトップアスリートの育成など非常に幅広いが、一番重要なのは県民の健康増進だと思っている。高齢化が進んでいる秋田県においては、高齢者やその手前である中高年齢層が気軽に体を動かす機会を作っていくことが必要。その関係では、令和2年に発行している「秋田県自転車活用推進計画」を活用してほしい。同計画では、高齢者が安心して自転車を利用できる環境や、外国人観光客が自転車を利用しやすい環境づくりについて指摘している。

具体的な施策としては、自転車通行帯の整備を計画的に進めてほしい。自転車が通行できないくらい狭くなっている場所や、線が古くて見えづらい場所があるため、道路管理者による適切な管理が必要。また、「AKITA 里山サイクリング推進事業」も是非推進してほしい。

○守屋委員

30代40代の現役世代で働いている人に運動することを求めることは難しい。自分も日常的に運動は行わないし、地域的にも自転車を移動手段にすることは現実的ではない。公民館にジムを設置している場合もあるが、アクセスしやすい公共施設に気軽に運動で

きる場所があれば、運動に取り組む人は増えるかもしれない。

アスリートの育成については、子どもが幼い時期から様々なスポーツに関わることができる、体験できる環境づくりが必要。小学校ではなく、もっと手前の幼稚園等の段階でスポーツに触れる機会があれば、子どもの興味も増えていくのではないか。中学校や高校の段階では、プロの選手と交流する機会が更に増えると良い。

○黒川委員

多様なスポーツ活動の促進については、高齢者が楽しく運動に取り組みやすい環境づくりが重要。10～15 分程度の簡単な運動で、家庭で取り組みやすい内容が望ましい。例えば、秋田弁の面白い運動動画が YouTube に掲載されていれば、子どもとおばあちゃんが一緒に楽しめるかもしれない。

アスリートの育成については、私の住んでいる地域でも、小学校に入った段階で、バスケットボール、野球、陸上競技等、狭い選択肢から選ぶ環境しかない。様々な選択肢から、自分に合ったスポーツを選ぶことができれば、もっと能力が伸びるかもしれない。日本には様々なスポーツがあることを知る機会があると良い。

●吉澤部会長

冒頭でユニバーサルツーリズムについても触れたが、例えば、方向性 4－①多様なスポーツ活動の促進の分野では障害者スポーツ、方向性 4－③アスリートの発掘の分野ではパラアスリートという視点があっても良い。

●吉澤部会長

次に、目指す姿 5 について説明をお願いします。

□石川道路課長

(施策の方向性 5－⑤について、資料 1 により説明)

●吉澤部会長

高速道路等の整備について説明があったが、昨年度の提言書では、高速道路の整備によるメリットだけではなく、通過されてしまうというマイナス面にも配慮が必要という点にも触れている。道路整備の関係で不具合を感じることがあればご意見をいただきたい。

○守屋委員

石孫本店の店舗については、湯沢インターチェンジや十文字インターチェンジから 10～15 分程の場所にあり、車でお越しのお客様にとっては特に不便は無いと思う。湯沢市では道路整備も着実に進んでおり、延伸によって更にお客様も訪れやすくなると思う。

○黒川委員

千葉旅館がある鹿角市の大湯地区は、最寄りの十和田インターチェンジまで10分程の距離にある。花輪地区や小坂町にもインターチェンジがあるため、鹿角地域では高速道路に関して不便を感じることは無い。

●吉澤部会長

お客様から、高速道路に限らず、周辺道路について不便さの声はないか。

○黒川委員

逆に、不便な場所にあると思われており、インターチェンジからの近さに驚く声が多い。

○豊田委員

日本海沿岸東北自動車道の整備が進み、近い将来、鶴岡市までつながると、秋田から輸出を行う際に秋田港ではなく、酒田港が利用される可能性があるため、秋田港と酒田港の競合を覚悟しておくべき。高速道路整備により、人だけではなく物流にも影響がある点については意識してほしい。秋田市が所管する問題かもしれないが、高速道路の整備によって秋田県の交通システムが変わっていく中での秋田港の位置付けについては、しっかりとビジョンを持っておくべき。

●吉澤部会長

前回の部会で、Google マップ上で新日本海フェリーが交通手段として検索できるようにとの意見があったが、その後の状況はどうなっているか。

□信太交通政策課長

前回の部会后、速やかに伝達しており、新日本海フェリーにおいて対応を検討していると認識している。

●吉澤部会長

対応が決まったら教えてほしい。

秋田港だけでなく、秋田港につながるアクセス道路の整備も併せて進めていただきたい。加えて、その内容がしっかりと周知されているという状況が大切かと思う。

○豊田委員

公共交通の見える化について、秋田県、特に秋田市は非常に先進的な取り組みを行っており、市町村やバス事業者を巻き込んで、秋田県全体で公共交通の情報が全て Google マップに掲載されている状態を目指している。

秋田市については、今年度中にバスロケーションシステムを実現させる。バスの運行状況が Google マップ上で確認できるシステムであり、非常に画期的である。

バスだけではなく、電車の位置情報もオンラインマップにリアルタイムで表示できる

よう、県からＪＲ東日本に働きかけてほしい。

□信太交通政策課長

電車の位置情報のリアルタイム表示については、首都圏等では既に取り組んでいる部分もあるが、まだ地方部には広がっていない。機会を見てＪＲ東日本とも相談したい。

（２）第１回部会での提案に係る県取組状況等について

（第１回部会で委員から意見があった施策の方向性について、資料を参考に委員から意見をいただく）

●吉澤部会長

目指す姿５における施策の方向性としては、①幹線鉄道とフェリー、②航空路線、③地域公共交通、④第三セクター鉄道となっている。

①幹線鉄道とフェリーについて前回の部会では、１次交通については引き続き維持していただきたいと申し上げた。関連する県取組として、新仙岩トンネルの早期実現や秋田新幹線の沿線地域の持続的発展プロジェクト、フェリー秋田航路を利用する旅行商品造成への支援、貨物の輸送支援が挙げられているが、追加の意見は無いか。

（意見なし）

●吉澤部会長

②航空路線の維持・拡充に関する県取組として、秋田空港に関しては、予約決済システムの導入支援や、冬季における若年層の需要喚起、旅行商品の造成支援等が挙げられている。また、大館能代空港については、３往復運航が実施されており、宿泊代金の割引キャンペーンや民間アドバイザー等の活用が挙げられている。

また、昨年度の提言書では、世界遺産の活用などを挙げている。

○黒川委員

大館能代空港の割引キャンペーンについては効果が大きく、利用して宿泊するお客様も多い。このキャンペーンがあって初めて大館能代空港を利用したという声もあり、引き続き広告宣伝に力を入れてほしい。一方で、割引が無くなった場合のお客様の反応については不安がある。

○豊田委員

大館能代空港について、能代市や鹿角市方面への相乗りタクシーを運行しているが、日本人の利用しか想定していない。一般的に、インバウンド観光客の旅行単価が高いほか、大館能代空港の周辺には、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡など、インバウンド向けにも目玉となる素材があるため、外国人も利用しやすいような環境整備が必要ではないか。

○守屋委員

割引キャンペーンについては継続していただければありがたい。また秋田空港について、台湾観光客に対する施策はもっと積極的に行った方が良い。

●吉澤部会長

空港や航空路線の維持は非常に大切な部分であり、引き続き取り組んでほしい。

大館能代空港の乗り合いタクシーについて、どういった仕組みで運行しているか概要を伺いたい。

□信太交通政策課長

大館能代空港の乗り合いタクシーが日本人の利用しか想定していない、という意見については事実関係を確認したい。

また、大館能代空港の3往復運航の維持については、インバウンドも含めた利用促進に取り組んでいきたい。

●吉澤部会長

外国人観光客が利用しづらい原因がコミュニケーションの問題だけであれば、それほどハードルは高くないため、改善に向けて取り組んでほしい。

③地域公共交通網の形成に関して、2次交通については新たに補助制度を設け、観光客と地元住民双方の利用ニーズに即した運行支援を行うほか、小回りのきくコミュニティ交通の導入を支援することとなっている。カーボンニュートラルの推進という視点も含め、意見をいただきたい。

○豊田委員

カーボンニュートラルについては前回の部会でも強調した。公共交通網の形成に向けた予算確保については、是非カーボンニュートラルの観点からも取り組んでほしい。

市町村が運営しているコミュニティ交通については、住民以外の利用を想定してないものが多いと思っている。秋田県に限らず全国的な問題だが、コミュニティ交通の情報がオンラインマップで検索できない状況では、住民にとってもその存在が分かりづらい。コミュニティ交通の整備に当たっては、住民だけではなく、誰もが使いやすいシステムづくりが重要。

また、地域公共交通については、人口減少によって利用者が減少し、やむを得ず代替バスを運行するという認識を持つ市町村が多いが、日本全体として見ると、東京、名古屋、大阪の3大都市圏においては、公共交通の利用者は10年程前から増加傾向にある。高齢化が進むにつれ、公共交通の利用者は増える可能性があり、高齢化の最先端である秋田県においては、地域公共交通の利用者増加やコミュニティ交通の再生強化に力を入れていただきたい。

○黒川委員

鹿角市においては、地域公共交通のアクセス性に課題を感じている。千葉旅館の最寄りのJR十和田南駅からバスの利用を希望するお客様については、アクセスの悪さから結局送迎が必要になっている。

●吉澤部会長

地域公共交通が利用しづらく、不便を感じている観光客は多いのか。

○黒川委員

自家用車を利用する場合が多く、困っている方は少ない。

一方で、買い物のために地域公共交通を利用する地元の高齢者は困っている方が多い。富山県富山市では、市内の生花店で500円以上の買い物をすると市内のバスが無料になるという取組を行っており、カーボンニュートラルの観点からも興味深い取組だと思っている。

○守屋委員

石孫本店の利用者についても、自家用車やレンタカーの利用が多く、困っている方は少ないと思う。ただし、市のコミュニティバスについては、市の中心部を周遊するもので、店舗がある岩崎地区は経路に入っていないため、そういった意味では困っている方は一定数いるかもしれない。

地域公共交通については、運転手の確保も課題であり、行政からの支援が必要だと感じている。

●吉澤部会長

大分県別府市でも、運転手の確保が大きな問題となっている。バスだけでなく、タクシーの運転手も不足しており、1時間待ちという状況もよくある。昨年度の提言書でも触れているが、人材確保に向け、職場見学とか職場体験、若しくはバスの運転体験等の取組が必要。

カーボンニュートラルの観点では、観光客も住民も、なるべく公共交通を利用するという必要性は理解できるが、地域の実情との兼ね合いの中でどのように調整を進めるかが難しい。

ライドシェアの関係については、県内の動きはどうなっているか。

□信太交通政策課長

日本版ライドシェアにかかる自家用車の活用に関しては、国も含め、関係者が制度の内容を整理している段階である。国での検討過程も注視しつつ、県内での活用可能性について、関係者と継続的な意見交換を行っていく。

●吉澤部会長

別府市では、別府版ライドシェアとして、コミュニティバスによるライドシェアの実証実験を行っている。このほか、全国でも導入方法を模索しているため、秋田県においても実情にあった方法を見いだしていただきたい。

③第三セクター鉄道については、地元住民の利用促進や運営費補助、インバウンド向け営業ツールの作成を支援することとしているが、この点について意見をいただきたい。

昨年度は、主に観光客向けとして、新たなチャレンジによる魅力づくりを行うよう提言を行っている。

地元の方が、移動の足として第三セクター鉄道を利用する機会は多くないと思うが、委員の皆さんの状況はどうか。

●黒川委員

日常で利用することは無い。地方に行けば行くほど車社会になるため、周辺の方で利用したという話を聞くことも無い。

○豊田委員

スイスの事例として、ツェルマットに行くためには、不便で、かつ料金の高い鉄道を利用する必要があるが、観光客は喜んで利用している。内陸縦貫鉄道には、その鉄道と同様の価値があると思っており、利用者が少ない原因は、県民の認知が低いことではないか。乗っていただくと分かるが、本当に絶景を楽しむことができる。弱点があるとなれば、W i - F i や、充電するための電源がないこと。W i - F i や電源など、観光客のニーズに沿うことができれば、更に人気が上がっていくと思う。また、人気を上げていくためには、まず何よりも、県内の観光関係者が、内陸縦貫鉄道道の景観が秋田の大きな観光資源の1つであるという認識を共有することが必要。

●吉澤部会長

数年前に利用したが、冬景色は見事で、秋の稲刈りの時期の風景も良い。利用しやすい環境づくりは進めつつ、関係者がその魅力をしっかりと認識した上で売り込みを行うことが必要。

○守屋委員

観光の目玉として、景観の動画を YouTube に挙げるなど積極的にPRすべき。また、県外客だけでなく、県民の閲覧も促進し、その魅力を知ってほしい。

○豊田委員

大阪府等で取り組んでいるが、例えば8月の1ヶ月間は県内の小中高校生は無料で第三セクター鉄道を利用できるという取組はどうか。由利高原鉄道は通学利用が多く、8月は空いているため、取り組みやすいのではないか。秋田にはこんなに良いところがある、ということを進学や就職で県外へ出る前に経験させれば、後で必ず経済効果として返ってくる。大きな予算が必要かもしれないが、小中高校生の運賃無料化は他の都道府

県でも事例はあるため、秋田県でも是非取り組んでいただきたい。

●吉澤部会長

次に目指す姿４に関する意見交換に移る。昨年度の提言書では、新県立体育館の活用についても記載しているが、体育館整備の進捗はどうなっているか。

□樋口スポーツ振興課長

本年６月の議会において、債務負担行為という形で２５年間分の予算の上限額を承認いただいた。これを踏まえ、建設と運営に要する入札公告を７月に実施し、年内には業者を決定する予定となっており、令和１０年の完成を目指している。

●吉澤部会長

昨年度、体育館については、競技利用以外の活用についても議論があった。体育館の利活用について、現時点ではどういった議論を行っているか。

□樋口スポーツ振興課長

県立体育館として、基本的には県民利用を充実させていく。併せて、東北でも最大級の規模を持つ体育館となるため、ノーザンハピネッツを始めとした興行でも積極的に活用され、秋田県のスポーツの盛り上がりを支える体育館を目指している。

●吉澤部会長

目指す姿４について、他に意見はないか。

(意見なし)

●吉澤部会長

目指す姿３については、議事（１）で様々な意見をいただいているため、目指す姿２について意見交換を行う。美酒・美食のあきたの創造に関して、①食のブランド化、②食品製造業の振興、③県産食品の販売促進、④食の魅力の発信と誘客、と大きく４つの方向性がある。

○守屋委員

ブランディングの促進について、秋田としてのＰＲも重要だが、地産地消の観点から、秋田の食材を使用している商品をＰＲすることも必要ではないか。先日行われた食のチャンピオンシップでの入賞商品についても、更にＰＲに力を入れてほしい。

○豊田委員

フランスの知人に秋田県の味噌や発酵食品を紹介する際、発酵食品が有名な福島や山形、青森との差をどう伝えたらよいか。

日本酒であれば、6号酵母の使用や低温発酵など、日本酒の本流としての仕込みを行っており、他の日本酒と比べ米の味が強い、という説明をしている。

つまり、他の商品との違いをはっきり示してこそブランディングにつながる。

□佐藤食のあきた推進課の佐藤です。

秋田県としても独自の酒造好適米の生産などに取り組んでいる。そういった独自性を強調した売り込みを心がけていく。

○黒川委員

前回の部会で、業者向けでこういった食材があるか探しやすい仕組みについて発言した。今後3年間でプラットフォームの構築を進めるとのことで、大変うれしく思っている。

ブランディングについては、外部の目からその商品がどう見えるのか、という点が重要。県内で完結できた方が良いが、引込み思案とされる県民性もあるため、ブランディングについては、県外の力を借りるということも必要かもしれない。

●吉澤部会長

昨年度の部会では、米粉の利用促進やパッケージのデザイン、小分け販売のほか、事業所間の連携や、北欧市場への売り込み等についても意見があった。これらについても、1年で解決する内容ではないため、提言書の素案作成においては、昨年度の提言書にならって記載していただき、そこから現状に照らして取捨選択していきたい。

●吉澤部会長

最後に目指す姿1について意見交換を行う。方向性としては、①稼ぐ観光エリアの形成、②ターゲットの的確な把握とプロモーション、③秋田ならではのツーリズム、④受入態勢の整備、⑤戦略的なインバウンド誘客となっている。

昨年度の提言書では、秋田観光DMPの構築と利用促進について記載しているが、現状はどうなっているか。

□小松観光戦略課長

観光DMPについて、システム構築は済んでおり、現在は宿泊事業者やDMOに対して、参加の声かけや、データ利活用のための研修等を行っている。

●吉澤部会長

システムの構築より、その後の利活用が重要であり、この点も提言書に含めていただきたい。

○黒川委員

人材育成や確保の関連では、親が観光業に従事している場合、土日の休みがなく、家族旅行等に行く機会がない。大分県では、平日の3日間程度、家族で過ごすために学校を休むことができる制度がある。子どもの学びと保護者の休暇を組み合わせた「ラーケーション」という制度だが、東北では青森県内でも同様の取組が検討されていると伺っている。秋田県でも取り組んでいただきたい。

●吉澤部会長

大分県別府市は観光業に従事する方が多く、昨年度から小中学校でラーケーションが行われており、好評だったため今年度は内容を拡充して実施している。土日が休みではない業態の人材確保にとっても効果のある取組と思われる。

□小松観光戦略課長

秋田県内でのラーケーションの動きは把握していないため、教育委員会と意見交換したい。

○守屋委員

インバウンド誘客に関しては、動画配信に更に力を入れてほしい。川連蒔絵や田沢湖でのSUP、ミニかまくらなど、体験動画は興味を引くのではないか。これまでも取り組んでいることとは思いますが、県民も興味を持ってSNSで発信するような動画作成に取り組んでいただきたい。

●吉澤部会長

大学の授業でも動画を活用している。動画が長すぎると飽きてしまうので、3分ほどが使いやすく、若者には訴求しやすいプロモーションだと思う。

○豊田委員

インターネット上でどう見えるか、という観点が重要。Googleマップを見ても、英語版でページを開いているのに、日本語名しか表示されない場合や、リンク先が日本語のページである場合が多い。修正もそれほど難しいものではないので、関係施設の状況を確認してほしい。

インバウンドを含め、県外の方からどう見えるか、が重要であり、PRしたいことはインターネット上に情報がなければいけない。特にインバウンドについては、インターネット上に情報が無いものは、存在自体が無いものと同じ。旅行の計画や予算はインターネット上の情報で決まるため、その点をもっと意識してほしい。

●吉澤部会長

昨年度の提言書では、方向性①の分野ではデジタル人材の育成について触れている。また、③では、教育旅行を想定した洋上風力発電の活用、農山漁村の風景や営みを生かした生活観光の推進について触れており、提言書の素案においては、こういった意見も

反映してほしい。

○黒川委員

日本のウェブサイトと海外のウェブサイトを比較すると、海外のサイトでは、そこに
いる人に焦点が当てられている。一方で日本のサイトは、綺麗な部屋や温泉など、風景
のみが掲載されている。インバウンド向けのPRについては、観光客が、その場所でど
のように過ごせるかイメージが付きやすいよう、モデルの活用についても検討してほし
い。

○守屋委員

この部会に関わることとなり、初めて「あきたファン」という県の観光サイトを知っ
た。知らない県民の多いと思うので、こちらの情報発信もお願いしたい。

●吉澤部会長

まずは県民に知ってもらふ、という点が本日の部会での大きなポイントになったかと思
う。3回目の部会では、これまでの議論を踏まえて事務局が作成する提言書案を基に
意見交換を行うため、委員の皆さんには引き続き協力をお願いする。

【閉会】